

身体表現活動における 5 歳児に適した題材の検討

— 経験内容の違いが身体表現に及ぼす影響に着目して —

幼児教育選修 竹内 和

I 問題と目的

領域「表現」には、「感じた事や考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と記載されている。「表現」の中でも身体表現活動においては、保育者の多くが表現の一側面として子どもの感情表出の大切さを感じ、その実行によって心の開放がみられると考え、その体験の積み重ねが想像力の増進につづくことを期待しているとしている¹⁾にもかかわらず、これらは実際には行われることの少ない内容だという報告がされている²⁾。また、様々な保育現場において身体表現あそびの実践を重ねてきた平野³⁾も、身体表現あそびの実践に対して、多くの保育者が「身体表現は苦手」という意識をもっていると述べている。それはつまり、子どもが身体表現を通して何を楽しんでいるのかと言う判断が、明確に分からないという点や、どう楽しませて良いのかわからないという題材の選び方やその後の展開の不安があるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、身体表現活動以前の経験内容の違いが、子どもたちの身体表現にどのような影響を及ぼすのか、また、身体表現の題材によって子どもがどのような動きをするかという点に着目し、身体表現活動における 5 歳児に適した題材を検討することを目的とした。

II 研究方法

1 対象とした実践

被験者：岡崎市 T 幼稚園 5 歳児
指導者：同幼稚園 5 歳児担任(園長)、
5 歳児副担任

2014 年 5 月 21 日「カタツムリ」
…生き物を育てる経験

2014 年 6 月 4 日「かお」
…絵本を読む経験

2014 年 6 月 4 日「たまねぎ」
…植物を育て、収穫した経験

2 手続き

子どもや日々の生活に即した担当保育者による身体表現活動を実践的な実験の対象とした。

その様子を 2~3 台のビデオカメラに撮影し、担当保育者は専用のマイクを付け、保育者の発話が映像と連動して録画できるようにした。その後、子ども一人一人の身体表現を分析した。VTR に収録した身体表現は、表 1 に示した身体表現を捉える観点の項目を使用し、各項目の基準に従って評価した。

3 研究の流れ

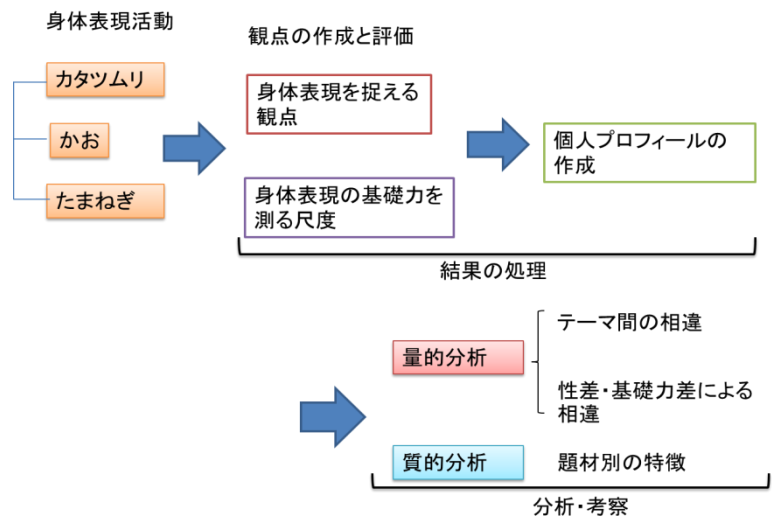


図 1 研究の流れ

4 分析の視点

子どもの身体表現を評価する観点については、鈴木⁴⁾の示した身体表現を捉える観点の項目を参考とした。その中で本研究の考察に必要と思われる点を一部変更した。使用した観点と基準は表 1 のとおりである。

表 1 身体表現を捉える観点

項目	具体的な観点	得点の基準
① イメージの具体性	題材へのイメージを具体的に表現している。	3：明確なイメージをもってなりきって表現している
	なりきって表現している。	2：イメージを漠然ともってなりきろうとしている
② イメージの独自性	他の子どもが思いつかない独自の表現をしている。	3：たいへん独特である
		2：他の子どもの模倣ではないが一般的である
③ 動き方の豊かさ	動きの種類、体の使い方、表情の在り方。	3：多様な動き、のびのびと大きくつかう、豊かな表情
	雰囲気を楽しんでいる。	2：2 種類の動き、日常の範囲内、まあまあ
④ 動きの変化	速度や方向を変化させたり複合的な動きで表現したり、動きを繰り返したりしている。	3：たいへんよくできている
		2：まあまあできている
⑤ 動きの確かさ	表現したいと思う動きを体全体や細部を使って意識的に行っている。	3：たいへん意識的にできている
		2：まあまあ意識的にできている
		1：できていない

3つの活動における個人の特定をし、それぞれ身体表現を3段階で評価した。この評価は指導教員と筆者が分析の視点を照合したうえで行った。

また、幼児の身体表現について考察する際、子どもの特徴や傾向を理解するために「身体表現の基礎力」を測ることにした。これは、「幼児期の感性尺度⁵⁾」と「子どもアクティビティ尺度⁶⁾」から成り立っている。「身体表現の基礎力」を測る項目は、指導者である副担任が評価した。

5 分析方法

身体表現のテーマと身体表現を捉える観点間、身体表現のテーマ別に見た身体表現を捉える観点と性、身体表現基礎力による差があるかを調べるために分散分析を行った。その後、身体表現のテーマにある場面別に身体表現を捉える観点において、分散分析を行い、個人プロフィールと合わせた考察を行った。

III 結果と考察

分散分析を用いた量的考察と、身体表現のテーマ別に場面を分けた質的考察を行った。

1 「身体表現のテーマ」×「身体表現を捉える観点」の関係

研究対象とした3つの身体表現活動のテーマと身体表現を捉える観点について分散分析を行った結果、テーマ間には差はなく、身体表現を捉える観点間に差が見られた。(表2)

	SS	d f	M s	F	P
テーマ	.040	2	.020	.038	.963
身体表現観点	10.814	4	2.704	63.147	.000 **
テーマ×身体表現観点	1.352	8	.169	3.945	.000 **
誤差 (テーマ×身体表現観点)	10.282	240	.043		

表2 「身体表現のテーマ」×「身体表現を捉える観点」分散分析の結果

2 テーマ別に見た身体表現活動の傾向

性差と身体表現基礎力差の側面からテーマ別に考察した。

1) 性による差

分散分析の結果、身体表現のテーマ「たまねぎ」にのみ、身体表現を捉える観点において性による有意差が見られた。男児は、「動きの確かさ」よりも、「動きの変化」、「動き方の豊かさ」の得点が高い傾向を示した。女児は、「イメージの具体性」よりも、「動きの変化」や「動き方の豊かさ」の得点が高く、また、「イメージの独自性」よりも、「動きの確かさ」の得点が高かった。(図2) 以上のことから、「たまねぎ」という身体表現のテーマにおいて、男児は身体全体や細部を使って意識的に表現したり、自分の現したいもののために動きを選択したりするよりも、空間や時間を意識したり、のびのびと身体を使

うような表現をしていることが分かった。

また、女児はイメージを具体的に表現したり自分の中にすぐに表現を思い浮かべるよりも空間や時間を意識したり、のびのびと身体を使う表現をしていることが分かった。他の子どもが思いつかない独自の表現をするよりも身体全体や細部を使って意識的に表現していることが分かった。

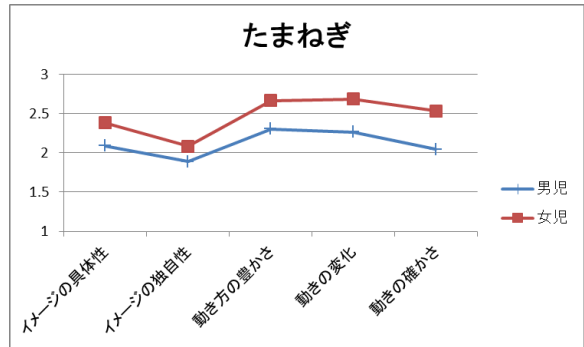


図2 「たまねぎ」における身体表現観点別の平均点

2) 身体表現基礎力による差

身体表現基礎力の側面から見ると、身体表現のテーマ「かお」にのみ有意差が認められた。(図3) 「かお」という身体表現のテーマは状況を表現したり、感情と動きを結びつけたりする表現のほか、「たくましい顔」「いたづら顔」など、抽象的な場面があった。このように具体的でない言葉を動きとして表現することが容易ではなかったと考えられる。その中で、身体表現の基礎力が高い子どもの方が、絵を真似て表現したり、自分なりに解釈したりすることが可能であったのではないかと推察される。

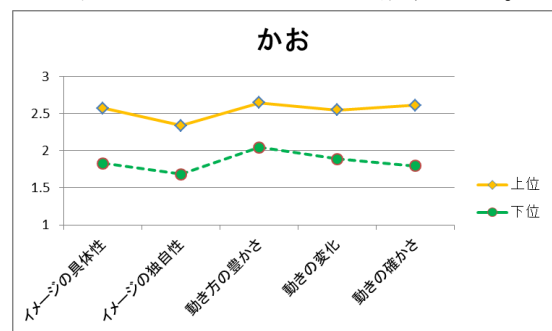


図3 「かお」における身体表現観点別の平均点

3 場面別に見た身体表現活動の傾向

分散分析の結果、全てのテーマにおいて身体表現のテーマにおける場面と身体表現を捉える観点間に有意差が認められたため、特徴的な子どもの姿を捉えながら、一つの場面において、主に経験させたいこと、表現のモチーフとなるものを考察の着目点として、場面ごとに考察した。テーマごとに計算した平均点の移り変わりは図4、図5、図6のとおりである。

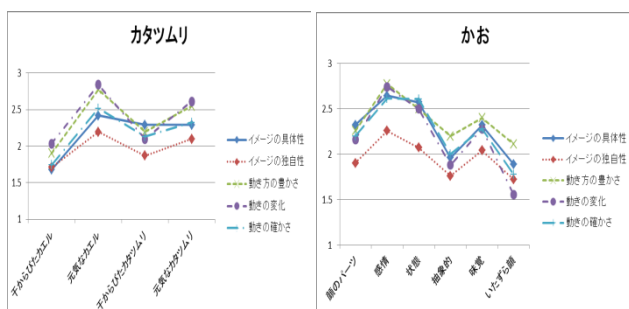


図4「カタツムリ」場面別の平均点

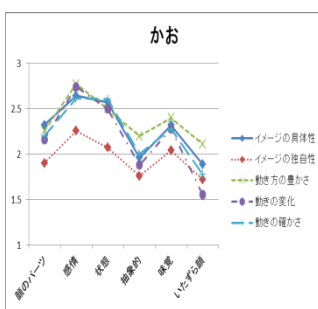


図5「かお」場面別の平均点

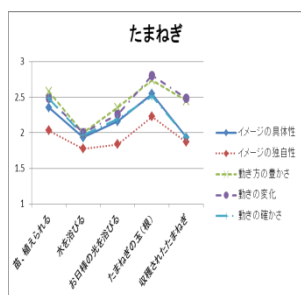


図6「たまねぎ」場面別の平均点

4 表現のモチーフ別考察

場面別に考察した後、3つのテーマの中から、全10個表現のモチーフを発見できた。そのため、それぞれのモチーフごとに子どもの姿と照らし合わせながら考察した。(表3)

表3 表現のモチーフ

表現のモチーフ	場面
1)想像して表現する	干からびたカエル、干からびたカタツムリ、植えられる苗
2)動き方を工夫する	元気なカエル
3)対象物を見ながら表現する	元気なカタツムリ
4)形を理解して表現する	顔のパーツ、たまねぎの玉(根)
5)心で思ったことを表現する	感情
6)状態を表現する	眠った顔
7)抽象的なものを表現する	たくましい顔、いたずら顔
8)対照的な表現をする	味覚
9)動きの力性を表現する	水を浴びる、太陽の光を浴びる
10)空間を意識して表現する	収穫されたたまねぎ

1)「想像して表現する」

自ら想像して表現するモチーフは、「動きの変化」や「動き方の豊かさ」は高くなるが、想像する内容(イメージ)は画一的になりやすいことがわかった。しかし、保育者がその状況や場面を具体的に言葉にしたことで、イメージの想起につながる子どもが見られた。また、独自の表現をしている子どもの姿を保育者が捉えて他の子どもと共有することで、他の子どもにもイメージが伝わったり、既存の表現の枠が外れて新しい表現が生まれたりすることが分かった。つまり、他者からのイメージを受け、動きにつなげることの出来るモチーフであることが分かった。

2)「動き方を工夫する」

動き方を工夫して表現するモチーフは、「動きの変化」が生まれやすい。その動きを強調させるような保育者の言葉がけにより、子どもの動きが大きくなったり変化が生まれやすくなるということが分かった。また、単純でわかりやすい動きの方が、動きが大きくなるのが推察される。また、動くことで身体の使用方を理解し、他の動きにつながったり広がりがあることということが分かった。

3)「対象物を見ながら表現する」

表現したいものを目の前にして活動することで、自分の表現したいもののために動きを選択したり、身体全体や細部を使って意識的に表現したりするなど、明確なイメージをもつことが出来る子どもがいることが分かった。その反面、対象物そのものに興味を持ち、身体表現から離れてしまう子どもがいることが分かった。

4)「形を理解して表現する」

5歳児にとって単純な形への理解はできているため、動きが生まれやすいことが分かった。また形を意識するための保育者による具体的な言葉がけが、子どもの動きを確かにも分かった。また、独自の表現をしている子どもの姿を子どもたちの間で見せ合うことで、そこから動きがより確かになることが分かった。視覚的に捉えさせることによって、イメージの広がりにつながるということが示唆された。

5)「心で思ったことを表現する」

自分の思いを伝えられるようになってきたり、感情表現ができるようになってきた5歳児にとって、思ったことを動きにして表すということは身近な表現方法であり、日頃から無意識のうちに行っていることであるためすぐに動きにすることができたり、動きをより大きくすることが出来るということが分かった。

6)「状態を表現する」

表現する自己(他己)の状態が身近である事で具体的に明確なイメージをもつことが出来るということが分かった。また、それによって、身体全体や細部を使って意識的に表現することが出来るということが分かった。

7)「抽象的なものを表現する」

言葉の意味を理解することが難しい題材は、身体表現における動きが生まれにくいということが分かった。今回の研究では、模倣したり、情報を得たりする絵本という素材があった。そのため、主に身体表現の基礎力が高い子どもにとって、イメージを表出する一助になったと考えられる。

8) 「対照的な表現をする」

本研究で対象とした味覚刺激を動きで表すことは、5歳児にとっても難しい題材であると考えられる。しかし、より身近な題材に対して対照的な2つの題材を用いることで、その移り変わりを楽しみ、動きが豊かになる様子も捉えられた。難しい題材であっても、対照的なものを用いることで、表現が可能になるということが分かった。

9) 「動きの力性を表現する」

動きの力性を意識するモチーフにおいては、イメージは多様にならないが、動き方は豊かになることが分かった。しかし、保育者のオノマトペ表現が、子どものイメージや動きを豊かにする要件の一つである様子も捉えられた。

10) 「空間を意識して表現する」

空間を意識する、つまり空間の中にいる自分を意識するということは比較的難しいモチーフであると考えられる。しかし、空間を意識して表現するモチーフでは、当初のイメージがはっきりしていなくても、動いてみることで変化が生まれていた。のびのびと身体を使って表現することで、動き方の豊かさや動きの変化が生まれることが分かった。

5 場面別身体表現の考察から得た経験による違い

1) 身体表現のテーマ「カタツムリ」

対象物を目の前にして観察しながら身体表現を行ったため、明確なイメージをもつことが出来る子どもがいるその反面、対象物そのものに興味を持ち、身体表現から離れてしまう子どもがいることが分かった。

2) 身体表現のテーマ「かお」

研究対象となる子ども全員が絵本を見て表現するというので、視覚的情報、聴覚的情報が統一されてしまうことが考えられた。そのため、イメージの独自性の観点は得点が低くなるということが分かった。しかし、表現活動を発展させる要因は視覚刺激、聴覚刺激のみとは限らないので、保育者の言葉がけやそれによって子どもが自分の経験と照らし合わせて生み出すイメージにより動きは豊かになっていくと推察された。

3) 身体表現のテーマ「たまねぎ」

たまねぎを育て収穫するという活動を自身の身体の動きで経験しているということが、身体を動かす表現に直接つながったのではないかと推察された。また、たまねぎの成長を見て、触って、匂いや感触を感じ取っているため、具体的に明確なイメージが生まれたのではないかと推察された。そのため、表現したいイメージが定まっているので、より具体的に表現しようとしていたのではないかと考えられる。

6 表現のモチーフの位置づけ

図7では10個の表現のモチーフを個人差の大小、難易度の高低によって位置づけた。5歳児に適した題材の傾向が、以下のように捉えられた。

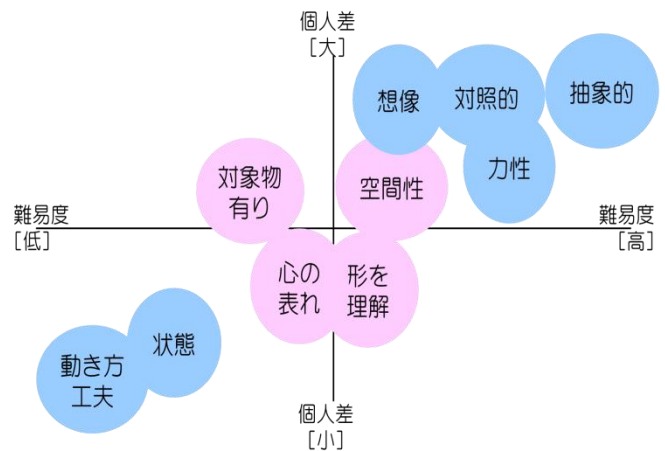


図7 表現のモチーフの位置づけ

IV 今後の課題

本研究では、身体表現活動における題材の検討を試みたが、実際の保育現場では、全く同じ場面、全く同じ子どもの姿はあり得ない。そのため、身体表現活動における画一的な方法や手順を示すことは難しいが、子どもを見る視点を考え、適した題材を身体表現活動に取り入れることは、保育者が苦手意識から抜け出す一助になると考えられる。

また、本研究では、題材に関して考察を行ったので、子ども同士の相互の関わり合いについて深く考察することが出来なかった。子どもたちの身体表現活動は、他者の模倣や周囲の刺激から展開されるものであると考えられる。そのため、心で感じたものを表現し、そこからまた次の活動が繰り返される中で、どのような他者との関わり合いがあるのかという点に注目して考察することを課題としたい。

V 引用文献

- 1) 鈴木裕子 (1998) 幼児の身体表現と保育に関する一考察 名古屋柳城短期大学研究紀要 第20号 182
- 2) 古市久子 (1995) 幼児の身体表現活動における諸側面についての一考察 大阪教育大学幼児教育研究室 エデュケア 第16号
- 3) 平野仁美 (2013) 子どもと保育者が共に育つ身体表現 ―草むらごっこを通して― 日本保育学会第66回大会発表要旨集 109